AROUND THE WORLD 6

環境に優しい言語学のすすめ[2]

呉人 恵　Kurebito Megumi　（富山大学人文学部）

貧しい言語・豊かな言語という幻想

トナカイの角切りは夏の大切な遊牧作業のひとつ

フィールド調査に行くとよく，「なんでコリャーク語なの？」と聞かれる。大体は適当にやり過ごしてしまうが，質問にやけに挑発的な響きが込められたりすると，売られたけんか？をつい買ってしまうことがある。

その人は，コリャークが暮らすツンドラで20年近く毛皮獣を狩ってきたロシア人だった。冬になると，毛皮を現金に換えて家族の住む町ノボシビルスクに帰っていく。その人が言った。「『コンピュータ』も『電話』もない貧弱な言語を研究してどうするんだ？」私は苦笑いをしながら答えた。「そういうロシア語の『コンピュートル』も『テレフォン』も借用語じゃない？大事なのは，必要なものを表わすのに十分な語彙があるってこと。コリャークにはコンピュータも電話も必要ないだけよ。」

たしかに，シベリアのツンドラでトナカイ遊牧に従事するコリャークにはコンピュータも電話も無縁だ。しかし，そこで生きていくために必要なものとそれらを表わす語彙は十分揃っている。シベリアというと不毛，酷寒などマイナスイメージがつきまとうが，実際には，家畜トナカイ，縦横に走る大河川の魚，森林の野生動物など動物資源にも恵まれている。ベリーや球根などの植物資源も重要な食料源である。コリャークはこれら多様な自然資源を巧みに組み合わせ，過酷な自然条件に適応対処してきた。そのことが，自然資源を満遍なく表わす豊富な語彙にも反映されている。

もちろん，語彙が豊富というだけではない。そこには，自然資源に対するきめこまやかな観察の跡が読み取れる。たとえば，生殖可能性を基準に分類される家畜の名称。性別による名称の違いがないことから，生殖活動が始まっていないことがうかがえる0歳児，生殖可能な成畜オスと認められるのは，名称に「本当の」という修飾成分がつく4歳からであることなどが，これら語彙の分析から自然に炙り出されてくる。

80年代後半からのペレストロイカを境に，急激に荒廃していくコリャークの生活を，おそらくはコリャーク語を通して批判しようとしたその人の気持ちもわからないではない。だが，政治とか経済とかといった価値観から解放され言語を等しく眺めるためには，環境が多様であるように，生活も，そしてそこから生まれる言語も多様なのだということを，まずは脳みそにとことん刷り込むことから始めるしかないだろう。

表紙写真について

ハルツームのバスターミナル

紺野 正典　Konno Masanori　（東京都足立区立江南中学校）

NEW CROWN 3年の教科書に載っている国，あのスーダンを春休みに訪れた。写真“Vulture and a Child”のイメージが強いスーダンだが，首都ハルツームの市民生活は比較的安定しているように見えた。人々は皆私に親切で，日本にはとても良い印象を持ってくれていた。また，走っているのはほとんどが日本車だった。首都のある北部はイスラム色が強いためか英語は思いのほか通じず，アラビア語が主流だった。

スーダンに着いたのは夜だった。私はスーダン人に道を尋ねた。とても親切にしてくれた。その彼に会いに，次の日彼の営む土産物店を訪れた。店には旅行者などはほとんどおらず，経営は苦しいようであった。

私は，そんな彼からスーダンのことをいろいろと学んだ。やはり，20年以上続く内戦の痛ましさを一番感じた。ほかにもたくさんのスーダン人と出会い，話をしたが皆優しく，日本から来た私を歓迎してくれた。

夕方，私が宿泊している安ホテルに戻り，窓を開けた。するとバスが楕円形に隙間もないぐらいにとまっている光景が目に飛び込んできた。夕方になると，バスがあちこちから戻って来るのだ。首都ハルツームも夕刻になると気温は30度ぐらいになっていた。首都を少し離れると，そこは砂漠で日中は40度を軽く超える。4月から7月までスーダンでは夏休み。なぜって？　この時期気温は，50度以上に達する。学費を稼ぐため，働きに出かける子どももいると聞いた。